

## マルコによる福音書 1章 1-8節

2014年5月8日

古本 靖久

1、聖歌 60番 「ヨルダンのほとり ヨハネはさけべり」

2、お祈り

3、テキストの位置

今日の箇所はマルコ福音書のはじめの部分であり、この福音書は何について書くのか決定づける所です。特に1節はこの福音書全体の表題と見なすことができますが、ここで**福音書記者がイエス様のことをどのように伝えたいのか**が分かってきます。

またマルコは下の表のように、マタイやルカと違いイエス様の誕生の記事などをまったく載せておりません。またヨハネ福音書のように「はじめからおられる」ことを強調していません。

マルコの元にはイエス様の誕生物語がなかった可能性もあります。しかし、**マルコが強調したかったのは、イエス様の公生涯（ガリラヤで公に活動をはじめて十字架につけられるまでの期間）であり、十字架の死であり、復活であったから、このような書き方をしたのだと考えられます。**

イエス様の誕生の場面はとても印象深く、心に残る物語です。しかしそれゆえに、それらの物語がイエス様の救いの物語よりも優位になってしまうこともあるでしょう。マルコはそうではなく、**イエス様の生こそが救いなのである**と言いたかったのかもしれない。

序文	1:1	福音書全体の表題
	1:2-3	旧約の引用
	1:4-8	洗礼者ヨハネの記述
	1:9-11	イエスの受洗
	1:12-13	イエス、誘惑を受ける
	1:14-15	イエスの伝道開始

マタイ	マルコ	ルカ
		献呈の言葉
		ヨハネの誕生予告
		イエスの誕生予告
		エリサベト訪問
		マリアの賛歌
		洗礼者ヨハネの誕生
系図		ザカリアの預言
イエスの誕生		イエスの誕生
占星術の学者たち		羊飼いと天使
エジプト逃避		神殿奉獻
ヘロデの悪行		ナザレに帰る
エジプトから帰国		少年イエス
洗礼者ヨハネ	洗礼者ヨハネ	洗礼者ヨハネ

#### 4、1 節ごとに

### 1:1 【神の子】イエス・キリストの福音のはじめ。

まず【神の子】と【 】をつけた理由から説明いたします。これは何かと言いますと、「いくつかの写本には欠けており、原本にあったかどうか疑わしい」という意味です。コピー機のある今と違い、他の教会や地域のために聖書を一冊増やそうと思ったら、すべて手で書き写さなければなりませんでした。そのため、思い込みによる写し間違いや語句の書き忘れがどうしても起こったわけです。そこで少しずつ違う写本を見比べて、その年代や地域、様々な要因を加味しながら、もともとの本文にはどう書いてあったかを研究していくのです。

たとえばマタイ福音書 21:28-32 に「二人の息子」のたとえというものがあります。わたしが中高生の時、使っていた口語訳聖書では、弟が考え直してあとから出かける、ほめられる立場にありました。それが新共同訳になると、弟と兄の順番が逆転して、兄がほめられるようになっていました。わたしは弟ですので、「何てことだ！」と思いましたが、これは研究の結果、後者の方が本文である可能性が高い、となったために起こったことです。

このような研究の結果【神の子】は、もともとの本文にはついていなかっただろうと判断されています。ではいつ、どのように書き加えられていったのでしょうか。

その前に、イエス・キリストという呼称について、少し整理したいと思います。イエスは名前です。旧約聖書に出てくるヨシュアというヘブライ語の名前のギリシア語読みです。その意味は「主は救い」というもので、それほど珍しくもない一般的な名前だったようです。

ですから、名前を呼ぶ時に他の人と区別をする必要がありました。例えば地名を付けて「ナザレのイエス」や「ガリラヤのイエス」、親の名前をつけて「ヨセフの子イエス」や「マリアの子イエス」。そしてイエス・キリスト。キリストというのは実は人の名前ではありません。苗字と名前というように思っておられる方も多いのですが、キリストとはヘブライ語の「メシア」という語にあたるギリシア語で、その意味は「油注がれた者」です。つまりイエス・キリストとは、「キリストと呼ばれるイエス」という人物を指すということです。

マルコ福音書の中で、「イエス・キリスト」という書き方はここにしか出てきませんが、彼は福音書を書き始める時に、「これからキリストと呼ばれているイエスの物語を始めるよ」という意味で、このような書き方をしたのでしょう。

ではなぜ【神の子】が付け加えられたのか。これはあくまで推測ですが、マルコの時代には「イエス・キリスト」という称号はとても特別なものだったろうと思います。しかし、後世になって、イエスについての「キリスト」という呼称があまりに一般化していったのではないのでしょうか。そこで写本家がさらに特別な尊称を付加した。それが【神の子】であったのではないかと思います。もし、わたしたちにとって今、「神の子イエス・キリスト」という呼称が一般的になっているとしたら、さらにどんな尊称を書き加えますか？

まだ1節の途中です。なかなか先に進みませんが、大事なところなのでじっくりいきたいと思います。現にこの1節だけで説教をするプロテスタントの先生もおられるようです。

次に「福音」です。福音とは good news、良き知らせ（喜びのおとずれ）と一般的に解釈されます。ではマルコにとって、福音とは何でしょう。

もともとこの「福音」とは、旧約の時代には勝利の知らせやその報酬を指す語でした。そこからイエス様と勝利の知らせとを結び付けて、「主の救いの知らせ」という意味へとなっています。パウロはその福音の意味をイエス様の十字架と復活、またそれらのことの宣教活動としてとらえていきました。しかし前回の学びでも触れましたように、マルコにとって、福音とはイエス様ご自身でした。イエス様の生、そしてその中で語り、おこなったことすべてが、つまりイエス様の活動全体が、マルコにとって福音だったのです。

ちなみにマタイでは、「天の国（御国）の福音」をイエス様が伝えるということが強調されます。マタイと比較しても、マルコがどれだけイエス様の出来事を伝えたかったのか、よくわかります。

最後に「はじめ」という言葉。この言葉には、時間的な初めを指す可能性も、また物語の始まりを指す可能性もあります。イエス様がこれから活動を開始しますよ、なのか、さあ物語を始めますよ、なのか、どちらでもあまりかわらないような気がします、どうでしょう。わたしは単純に、さあ、第1幕が開きますよ。早く席についてください、という感じでとらえています。

**1:2** 預言者イザヤの書に「見よ、わたしはあなたより先にわたしの使者を遣わす。彼はあなたの道を整えるだろう。

預言者イザヤの書にとありますが、実際には前半が出エジプト 23:20「見よ、わたしはあなたの前に使いを遣わして」からの引用で、後半はマラキ 3:1「彼はわが前に道を備える」からの引用です。マルコが単純に間違ったのでしょうか。そうであるとも考えられますが、可能性が高いのは、洗礼者ヨハネの伝承の中に、すでに旧約聖書からの引用も付随していたという考えです。前回、マルコ福音書はイエス様が十字架につけられてから40年経ってから書かれたことを学びました。洗礼者ヨハネはそれよりも早く(2~3年)亡くなっています。マルコの元にはイエス様の伝承と同じように、洗礼者ヨハネの伝承も集まっていたのでしょう。そこには、「ヨハネという者が、出エジプト記やマラキ書が示すように現れた。彼の姿はエリヤのようであり、まさにエリヤの再来であった。さらにその言葉はイザヤ書にあるように…」と、洗礼者ヨハネの出現は旧約聖書に記されたこと、つまり神さまによって約束されたものであったことがすでに書かれていたのです。それをマルコは採用したのです。

彼は何のために来たのでしょうか。使者として、つまり先駆者として、あなたの道を整えるため、とあります。このあなたとは、そう、イエス様のことですね。でも、旧約聖書では、主（ヤハウェ）のことを指していました。

1:3 荒れ野で呼ばれる者の声。『主の道を備え、その道筋をまっすぐにせよ。』と書いてあるように、

こちらは間違いなくイザヤ書の引用です。イザヤ 40:3「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。」から引用されています。しかしイザヤ書では、「主」とは神さま（ヤハウェ）を指しているのに対し、マルコ福音書ではイエス様のことを指しています。

このように旧約聖書の言葉を引用して、実際に起こった出来事を理解していくことは、初代教会からおこなわれていたようです。特にユダヤ人のために書かれたとされるマタイ福音書には、この「定型引用」が多く見受けられます。

しかしマルコ福音書において、「定型引用」があるのはこの一か所のみです。しかもここは洗礼者ヨハネについて書かれている箇所ですので、マルコ福音書はイエス様の生涯について、旧約聖書とは結び付けて考えてはいないということがわかります。マルコの共同体はユダヤ人ではなく異邦人が中心となっていたということもあるでしょうし、マルコはイエス様の公生涯のみにスポットを当てたのかもしれませんが、マルコ、イエス様の旧約からの連続性や降誕について触れていくと、イエス様の生がぼやけてしまうと思ったのではないのでしょうか。

1:4 洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しに至る悔い改めの洗礼を宣べ伝えていた。

洗礼者ヨハネの登場です。彼の紹介は非常にあっさりしています。これはマルコ福音書が書かれた時代、洗礼者ヨハネはかなり名が通っていたということを示します。

ヨハネが現れた荒れ野というところ、そこは砂漠とは違い、草木もあったようです。また人里離れた場所で、神さまと交わる場所という意味で使われることもあります。



しかし、当時のイスラエルの人々にとって、「荒れ野」は特別な意味を持つ場所でした。

出エジプトのあとイスラエルの民は40年間さまよい、カナンの地に入りましたが、そんな彼らにとって、「荒れ野」とは神さまが厳しい訓練の中で、彼らを救いへと導いてくれるところだったのです。つまり救いは荒れ野から始まると考えられ、当時の革命的なメシア運動も荒れ野と結びつく傾向にありました。

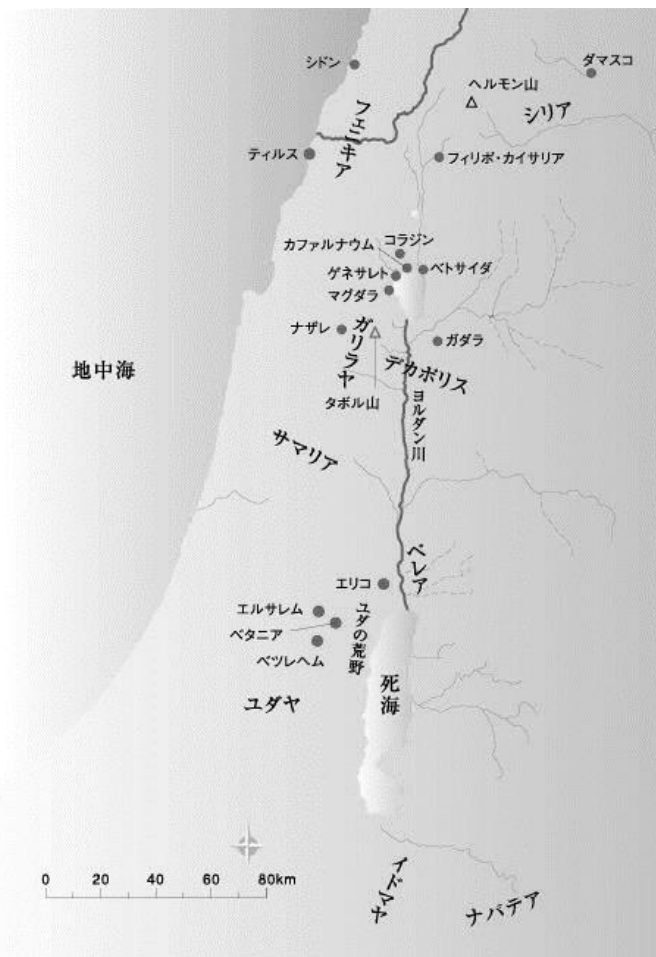
その地で、罪の赦しに至る悔い改めの洗礼を宣べ伝えていたのが洗礼者ヨハネです。

赦しという語には、ある人を法的な関係（束縛）から解放するという意味があります。また英語で let や leave のように、そのままにしておく、ほっておくという意味も持つそうです。つまり「罪の赦しに至る」とは、罪から解放される、罪があるけれどもそのまま見逃してもらえ（そのままの自分で受け入れてもらえる）と考えてもよいのかもしれませんが。

**1:5** ユダヤの全地方とエルサレムの全住民は、彼のもとに出て来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

先ほどの節で、「ヨハネは悔い改めの洗礼を宣べ伝えていた」とあるとおり、彼は洗礼の意味についても語っていたのかもしれませんが。多くの人はそのヨハネのもとにきて、自分のもろもろの罪（原文では複数形です）を告白し、洗礼を受けます。

ここでマルコは、ヨハネの元に来る人たちは「ユダヤの全地方とエルサレムの全住民」であったと書きます。つまりヨハネの活動はエルサレム、ユダヤ中心であったというのです。これから、イエス様の物語を読んでいきますが、イエス様の元にはガリラヤを中心として、パレスチナの全地方、そしてツロやシドンのような異邦人地域からも人がやってきます。この違いを、マルコは強調しようとしたのかもしれませんが。つまり旧約聖書の成就としてユダヤに遣わされた洗礼者ヨハネと、全世界に対して救いの開始を告げられるイエス様という対比を描きたかったのではないのでしょうか。



**1:6** ヨハネはらくだの毛衣を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

NRSV というアメリカで 1989 年に出された聖書の翻訳では、「毛衣を着て」という部分を「hairy man : 毛深い男で」と訳してあり、ひっくり返りそうになりましたが、それはともかく、その姿は旧約の預言者エリヤと重ねあわされてきました。

旧約聖書には、エリヤが外套を羽織っていること（王上 19:19）、毛衣を着て、腰には革帯を締めていること（王下 1:8）が書かれています。

おそらく、ヨハネが登場した頃（あるいはマルコ福音書が書かれた頃）には、エリヤのイメージというのが人々の間に浸透していたのでしょう。そのイメージにならってヨハネが生活したのか、あるいは福音書または伝承の書き手が二人のイメージをだぶらせて書いたのか。どちらにしても、このヨハネの描写は明らかに預言者エリヤの姿です。それは預言者エリヤが終末の時に再来すると信じられていたことにも関係しますし、また洗礼者ヨハネこそ、預言者エリヤなのであるということをも言っているのです。

**1:7** 彼は宣べ伝えて言った。「わたしの後から、わたしよりも力のある方が来られる。わたしは、その方の履物のひもをかがんで解く値打ちもない。

新共同訳では「わたしよりも優れた方」となっていますが、きちんと訳すと「わたしよりも力のある方」となります。優れたというと能力などのイメージをもってしまいがちですが、そうではなく、ヨハネと比べて、力強い方が来られるということです。

さらに、後から来られる方とヨハネとの関係についても述べます。履物のひもを解くのは、当時奴隷の仕事でした。ヨハネは言います。自分は後から来る人と、主人－奴隷の関係にもなれないと。ヨハネの小ささを誇張して表現することは、イエス様の力をより大きく見せることとなります。

**1:8** わたしは水であなた方に洗礼を施したが、その方は聖霊で洗礼を施すだろう。」

ヨハネは水で罪の赦しに至る洗礼を施していました。そして後から来る方は聖霊で洗礼を施すだろうとあります。まずこの「だろう」という表現について触れます。これは一般的には「未来形」と呼ばれる形で、2節にもありました。この未来形を新共同訳聖書は「洗礼をお授けになる」という言い切りの形にしています。これはギリシア語での未来形概念が日本語のそれと異なるのが原因です。日本語の未来形では、「明日は晴れるだろう」とか「中日は今年もBクラスだろう」とか、あくまで不確定な要素を含んでいます。それに対してギリシア語では、先に起きる出来事であるにもかかわらず、それは必ず起こるという意味もあるのです。たとえばこの8節の「洗礼を施すだろう」という言葉は、「未来に必ず洗礼を施すということが決まっている」というニュアンスを含むのです。

口語訳聖書の時には、すべてこれらのギリシア語での未来形は「～だろう」と訳されていました。しかし新共同訳になって、「～だ」と言い切りの形に変わりました。その言わんとする意味も分かるのですが、このレジメでは口語訳同様、未来形は「～だろう」と表記することにします。ですから「～だろう」と出て来たときは、そのことはすでに起こることが決まっているという意味を含む、ということも意識して読んでいただけたらと思います。

マルコは洗礼者ヨハネの後から来る方、つまりイエス様をどのような方として見ていたのでしょうか。「聖霊で洗礼を施す」という表現が出てきます。マタイ・ルカ福音書においては「聖霊と火」となっていますが、マルコは「聖霊」だけです。聖霊には、風や嵐といった意味もあり、そのイメージには裁きというものもあるかもしれません。しかし、処罰の審判である「火」ではなく「聖霊」による救いの洗礼のイメージを、マルコはイエス様に対して持っており、強調したかったともいえます。聖霊による洗礼、その恵みがどのようにわたしたちに与えられるのか、さあ、マルコ福音書を読みながら、ご一緒に聞いていきましょう。

今回の学びは、これで終わります。次回は5月22日(木)10時30分～で、「イエスの受洗、誘惑、伝道の開始(マルコ1:9～15)」について学んでいきたいと思っております。